



巻頭言

高橋五郎（愛知大学国際中国学研究センター所長）

今回のジャーナルも、多彩な査読付き論文を掲載することができた。論文数は8本、うち5本は、昨年のICCS国際ワークショップで報告された内容を論文化していただいたもの、3本は投稿論文である。いずれも査読をいただき、質の高い優れた論文ばかりに仕上がった。この場を借りて、ご苦勞をおかけした査読者の方々にも厚くお礼を申し上げます。

電子ジャーナルの性格から特集といったものは組まず、幅広い研究成果を迅速に公開することを目標にしているが、その意味では今回もこの原則を踏襲することができたことに感謝したい。

さて、イタマール・リー氏論文、佐藤敦信氏論文、Zhihai XIE氏論文、平野孝治氏論文、大澤正治氏論文の各論文はそれぞれの専門分野から中国の台頭と国際的環境の変化を研究した成果の一部である。ICCSは比較的早くから中国の台頭を念頭においた国際シンポジウムやワークショップを開催してきているが、以上の諸論文は、さらに一歩前に出る研究成果として位置づけることができる。

残る3本は純粋な投稿論文であり、査読を経て掲載したものである。このうち佐藤・菅沼両氏論文は主に既往の諸統計や先行研究書を踏査しつつ、中国の食生活の変容を消費者の年齢、所得、地域などをセグメント化し、きめ細かな分析を通じて考察したもので、非常に新しい、かつ食生活の変容実態が正確に把握できる内容となっている。

納富氏論文は巨大鉄鋼企業を育成した二人の世界的鉄鋼王、ラクシュミ・ミッタル氏、沈文英氏の軌跡を追いながら、現代巨大鉄鋼企業の発展史を描いた論文であり、先行する諸業績を一つにまとめ上げた労作である。

高橋論文は全国展開を行う巨大なある農業龍頭企業を事例に、中国農業産業化政策の評価を試みた論文である。この論文の結論は、まだ成功したとはいえないとするものである。

なお、投稿論文はICCSのホームページを通じて、本ジャーナルに投稿されたものであるが、簡便にフォーマットに投稿できるようにしたこと、随時発行に切り替えたことなどから、投稿論文が増加することを期待している。